



西片建築設計事務所  
Atelier nishikata

小野 弘人

Mosquito Park (モスキート・パーク)

1965年  
1989年  
1991-94年  
1994-98年  
1999年  
2000年

東京生まれ  
文化学院卒業  
入江経一+パワーユニットスタジオ勤務  
青木淳建築計画事務所勤務  
B ゼミスクーリングシステム修了  
西片建築設計事務所設立

Q:どのような学生時代を送られていましたか?

設計課題を出すために映画を見たり、本を読んだり、日常の些細な事柄を含めあらゆる事を建築や芸術の問題に置き換えて考えていました。映画とか哲学とか音楽とか小説をどうやって建築にするのかということを終始考えていたように思います。

Q:卒計での目標はありましたか?

将来建築を職業としてやっていこうという自覚は生まれつつあったので、自分なりの思想なりコンセプトというものをここで確立したいなと思っていました。一年近い時間をかけることが出来るのだから、他のジャンルのものをどうやって建築化するかということに徹底的に取り組み、集中して納得出来るものをつくりたいと考えていました。映画や音楽は形になっていないわけで、映画を見てそのまま建築化することはなかなか出来ないのですが、それをどのように建築にしていけるのか。また対象は映画という一つのジャンルではなく、音楽、哲学、小説、そして勿論建築もあるわけで、それらをいかに集約していくのか、ということです。

Q:コンセプトの着想は何処にあったのでしょうか?

これは私の実家とその周辺が敷地です。10~12mの高さの崖が、黒澤明監督の『天国と地獄』のように、上の実家のある住宅地域と下の商業地域を隔てています。家に行くには必ず坂道を回り込まなければなりません。もっと直接的に下に行きたいという衝動的な欲望が発端です。

Q:当時、社会性ということは考えられていましたか?

ここで言う“社会性”というものが何を定義しているのかわかりません。もし“社会性”が通俗化されたものであるならば、それは単なる慣習でしかないと考えます。

卒制の話に引き戻せば、その当時、最初の衝動的欲望を自分なりに認識し整理していく中で、“境界”について考え始めました。

もう少し詳しく話せば、ここで考えていた境界《線》には3種類あります。

ひとつは、ベルリンの壁に代表されるような物理的境界です。(当時はベルリンの壁はまだ存在していた。)これは、モノとしてリテラルな壁が立ちはだかっていることから、視覚的にも身体的にも(壁の)向こう側が存在し、行けない場所を規定する境界線です。

二つ目は、二次元の地図上に、シングルラインで記されている国境線や、海岸線といった観念的境界線です。これは、二次元上に引かれた線と実際に訪れた場所にある境界線を見た(実際は見えない)時とのギャップが露呈するものです。例えば、海岸線に至っては絶えずその境界は流動的に変化します。

最後に、先程も話に出た『天国と地獄』の中でも描かれている心理的境界です。この境界は、ベルリンの壁が崩壊しようとも人の心の中に生き残る厄介な境界です。

ここに揚げた3つの境界は、それ自身が各々問題を含み込んでいます。

卒制の敷地は、物理的な境界(崖による上と下の断絶)と心理的境界(住宅地と商業地)が完全に一致していること、その一方で二次元の地図上では両者は何の隔りもなく隣り合っていること、それらが問題でした。私は、これらの境界《線》をどのように並列、温存、削除、挿入させていこうか考えていました。

Q:卒計と現在の活動との関係性はありますか?

何年ぶりに模型を見たのですが、恥ずかしいけれど基本的にはあまり変わっていないと思います。

Q:卒計を通して何を学びましたか?

学んだというよりは覚悟を決める機会であったと思います。

普段の課題では、ここで出来なかったことは次の課題でやれば良いというような逃げ道が用意されているため、切実な状況に自分を追い込むことはなかなか難しいことです。でも卒制は、これが最後なんだという強迫観念みたいなものがあり、この先本当に建築をやっていくのかを自分に問わざるを得ない。そういう意味で学生時代の中で最も切実な状況を強いられる貴重な時間であると思います。



写真撮影 / 写真家 山岸 剛

Q:学生に向けて一言お願いします。

形(案)が出来たとしても一旦必ず、「待てよ。これはもしかしたら誰かに言われているのではないか?自分でも知らない内に誰かに出された案なんじゃないか?」と、もう一度自分に聞いてみることを。“自分”という準拠枠を絶えず設定し続けること。ぐっと堪えて本当に自分の頭の中から出てきたものなのかを絶えず自分で自分に問いかけることが重要だと思います。

インタビュー・文 / 法政大学 三浦 寛滋